

保育者養成校におけるピアノ指導法

～コードの学習を通した能動的学修への試み～

Piano Teaching Methods in Preschool Teacher Education Programs

—Promoting Active Learning Through Chordal Studies—

横 溝 聡 子[※]

Toshiko YOKOMIZO

In undergraduate programs, students are expected to take an active, student-centered approach to learning. As students learn to play the piano in preschool teacher education programs, it is preferable for them to also acquire chordal accompaniment skills. The current paper evaluated effective teaching methods in introductory classes by encouraging active learning through chordal studies so students can improve chordal accompaniment skills and score reading abilities. The results suggest that incorporating chordal learning and ensembles from an earlier period has a positive educational effect.

1 はじめに

近年、学士課程教育では「何を教えるか」ではなく、「何ができるようになるか」という点に力点が置かれ、学生主体の能動的学修による教育が求められている。保育者養成校においては、表現領域の学習として主にピアノの学修が取り入れられているが、短期大学などの保育者養成校では、ピアノ初心者も多い中、幼児教育現場で必要とされるピアノの演奏技術を1～2年の期間で指導していくことは容易ではない。授業では、ピアノの基本的な演奏技術の習得を目指した指導が行われるが、そこでの指導内容には、幼児曲の弾き歌いやコードによる伴奏付けなども含まれている。授業での指導と学生の自学自習(練習)により、ある程度の表現技術は身に付いていくが、短期間の学修において保育現場で活用できる能力を養うために十分な指導ができているとは言えない。学生が「これができるようになった」と自信を持つことのできる授業の構築が必要である。本稿では、コードの入門的学修を通して、能動的学修への指導方法への在り方を考察していくものである。

※ 幼児教育学科、音楽科

2 研究の視点

2-1 能動的学修(アクティブ・ラーニング)

平成24年8月28日の中央教育審議会答申では、教育の質的転換が求められており、そこには「教員と学生が意志疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。～中略～ 実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる」とある¹⁾。この答申の用語集では、アクティブ・ラーニングについて次のように定義されている²⁾。

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等によっても取り入れられる。

近年アクティブ・ラーニングについては研究も進められ、多くの大学でも実践されてきている。溝上はアクティブ・ラーニングについて「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している³⁾。

アクティブ・ラーニングは主に講義型の授業において、教員による一方的な授業の在り方を転換するための方策として取り入れられてきているものである。教育改善のための説明によく用いられる「ラーニングピラミッド」では「講義を聴くだけでは知識の定着率が5%、視覚教材を使用すると20%、グループ・ディスカッションをすると50%、活動や体験をすると75%、他者に教えると90%に記憶の定着率が上がる」としている。これらの数字については根拠がないなどともされているが、多くの研究者が一方的な講義のみでは学習の定着率が悪く、様々な能動的な仕組みを取り入れることで記憶の定着率が上がることが経験的に理解されている^{4) 5)}。

ピアノの実技の授業は、それ自体が能動的学修であるので、ピアノ実技指導における能動的学修の視点での研究は少ない。授業では、学生が練習してきた課題に対して教員が技術や表現についてアドバイスをし、それに対して学生が自身で修正・改善する。それに対し、教師が更なるアドバイスをし、学生が自ら工夫しながら実践していく。その繰り返しがピアノ実技の授

業内では行われている。しかし、教師に言われた通りにやるだけでは能動的とは言えず受動的な授業になることも在り得る。教師のアプローチに対して、学生自身が考え、工夫し、そこから学生自身の表現が出てくることが実践で使える応用力を身に付けることが大切なのである。

2-2 保育者養成校におけるピアノ教育

幼稚園教育要領「5 感性と表現に関する領域『表現』(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」の解説に「教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんでいる姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになるうえで、重要な経験である」⁶⁾とあるように、幼稚園や保育園で一日の多くの時間を共にする保育者の音楽的技能や態度が子どもたちへ与える影響力は大きいといえるであろう。音楽は「表現」の一領域ではあるが、保育者養成校としてその領域の音楽的技能を養うことは必須である。保育者養成校においてピアノに特化して演奏技術を身につけさせることに対して様々な意見があるが、現在のニーズを考えたとき、ピアノ教育は必要である。平石(2014)は全国47都道府県の幼稚園、保育所を対象とした調査を行っている。調査票を郵送した幼稚園・保育所計282件中、有効回答92票の調査結果では、保育者養成校での音楽教育に関して幼稚園や保育所は、ピアノ曲の指導については40%、弾き歌い指導には58%が教育の充実を求めているとしている。また、その中で、より良い演奏のためにコードネームによる伴奏付けの能力を求める回答も少なくないとしている⁷⁾。また、坂田ら(2009)の調査では、東京と埼玉の保育者へのアンケートにおいて、保育者の弾き歌いの技能が「必要」との回答は66.4%、「やや必要」も合わせると93.4%にも上っている。ここでは伴奏に困難を感じた場合の対応についても調査を行っており、「自分なりに簡略化する」82.7%、「簡易伴奏を探す」49.1%、「自分で編曲」38.2%、「コードネームを読み取りながら伴奏する」26.4%などが挙げられている。楽譜の簡略化や編曲、コード付けをするためには、調性や和音、コードネームなどの知識や経験が必要であり、音楽理論や様々なピアノ演奏表現についての教育的アプローチが求められている⁸⁾。

保育者養成校でのピアノ未経験者やピアノ学習経験が少ない学生に対する指導法の研究は、これまでも多くなされてきている。コードの学修については奥田(2009)⁹⁾や浅見(2019)¹⁰⁾らの研究があるが、主にピアノ伴奏技能向上を目的とした研究である。

ピアノ初心者に対する教育において、ピアノを「弾く」という技術的な問題と読譜力をいかに身につけてさせていくかということがまず重要なポイントとして挙げられる。幼児教育の現場で必要とされる幼児曲の弾き歌いや伴奏を考えたとき、コードネームの知識とコードによる伴奏付けの技術が身に付いていれば、より良い保育に繋がるであろう。筆者が所属する保育士養成校である短期大学(以下、本学)の学生も平成29年度の調査で、ピアノの指導を行う「保育表現技術 器楽Ⅰ」の履修者147名のうち、約3分の1の学生がピアノ未経験者であった。

「保育表現技術 器楽Ⅰ」は1年次必修、「保育表現技術 器楽Ⅱ」は2年次の選択科目である。「保育表現技術 器楽Ⅱ」も多くの学生が履修しピアノの学習を続けているが、1年ないし2年間で確かな読譜力やピアノ演奏表現技術を身につけさせていくことは容易ではない。時代と共に変わる多様な学生のピアノに対する興味関心を引き出し、短期間でより効果的にピアノ演奏表現技術を習得させるために、学生一人一人にあった方法を考えつつ、履修者全体の技能を向上させる指導法を工夫していかなければならない。

筆者は昨年度、本学の幼児教育学科「保育表現技術 器楽Ⅰ」において使用している『ピアノ・テキスト』¹¹⁾に含まれるアンサンブル曲に着目し、アンサンブル曲を取り扱う時期やその効果について考察した。その結果アンサンブル曲の扱い方によって様々な学修効果が期待できることが明らかとなった¹²⁾。アンサンブル(連弾)による効果について梁島ら(1993)は、「学習意欲を回復したり、高めたりする効果も大きいといえる。ともすればテクニックにとらわれがちな独奏曲に比べると、自由で伸々とした音楽表現が得られ、個人のテクニク的な弱点よりも、むしろ音楽的長所が生きた演奏になる点は注目される」と述べている¹³⁾。学生同士のアンサンブルでは、協同で一つの音楽を創り上げる中でディスカッションし、互いに刺激し合い、そこから創意工夫が生まれ、能動的な学修になる。そこでは一人での演奏では得られない音楽の楽しさを味わうことができ、学習へのモチベーションも上がるであろう。アンサンブルはピアノ実技における、より能動的な授業展開の一つの方法となるのではないだろうか。

3 研究の目的

本学の1年次必修科目である「保育表現技術 器楽Ⅰ」ではピアノ指導を行っている。この授業はピアノ演奏の基礎技能を習得させ、豊かな音楽性を自主的に体得させることを目的としている。学生は、90分1コマの授業を45分ずつ個人レッスンとML(ミュージックラボラトリー・システム)を使用しての集団レッスンを受けることになっている。2019年度の履修者は136名であり、1クラス36名(1クラスは28名)に対し、1名の教員がMLで集団レッスンを行い、5名の教員が個人レッスンを担当している。授業ではドレミ楽譜出版社の『幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト 改訂版 ―レッスン24とその応用―』(以下、『ピアノ・テキスト』と表示)を使用している。

筆者は、本学音楽科における音楽通論や伴奏法の授業でコードネームについて扱い、コードによる伴奏付けの実践指導を行ってきた。その中で、ピアノ指導でもピアノ学習の早い段階でコードを取り入れ、学生がコードに対する知識を得ていたほうが、読譜や演奏に効果的で良いのではないかと考える場面が増えてきていた。

本学幼児教育学科でのコードネームの指導は、「保育表現技術 器楽Ⅰ」「保育表現技術 器

楽Ⅱ」「保育表現技術 音楽Ⅰ」「保育表現技術 音楽Ⅱ」で行われている。1年次の必修科目である「保育表現技術 音楽Ⅰ」でのコードネームの扱いは16回目の授業以降である。「保育表現技術 音楽Ⅱ」ではメジャーコード、マイナーコードを使用した伴奏付けの授業が4回行われ、「保育表現技術 器楽Ⅱ」ではコードネームによる即興演奏体験が行われている。1年次必修科目の「保育表現技術 器楽Ⅰ」で使用している『ピアノ・テキスト』では、コードネームについてLesson9-1「カデンツ」とLesson9-2「三和音」のところで扱っている。しかし、楽譜にコードネームが書かれているが、通常の授業では時間的な制約もあり、簡単な説明のみ、或いはコードネームに触れずに終わってしまうこともある。

ピアノ初心者の特徴として、弾いている音のみに意識が向くため次の音が読めず、従って指の準備も遅れ、結果なかなかスムーズに弾くことができない状態が見られる。そのことが、更に音の動きや音楽の流れを感じられないことへとつながり、手の動きをなかなか覚えられずうまく弾けないという悪循環に陥りやすい。また、違う動きをする両手に同時に意識を向けることの難しさもある。これらの問題を解決するための試みとして、コードを覚え活用できるようになると演奏にどのような効果が生じるであろうか。また、通常は個人個人への指導であるが、連弾やグループでの学生同士のアンサンブルにおけるディスカッションなど、より能動的な指導を取り入れた場合と、個人指導のみとの指導効果の違いについても検証したい。

4 研究方法

4-1 研究対象

本研究は、筆者が担当している学生8名を対象に実施する。担当学生は、ピアノ経験年数が比較的長い学生が7名、経験年数が1年の1名である。経験年数は長くてもピアノを習っていたのは小学生まででブランクがあり、ピアノに対する不安感を持っている学生もいる。全体的にはうまくなりたいという意欲が高く、真面目に練習にも取り組んでいる。全くのピアノ初心者ではないため、ある程度の演奏技術と理解力を持っている。8名という少ない人数であり、ピアノ経験者への指導になるため、指導法研究という点においては偏った検証になってしまうが、この研究から一つのヒントを得られるのではないかと考える。

授業は45分ずつでグループが入れ替えになるため、4人ずつのグループで実施する。1班(3年以上のピアノ学習歴がある)、2班(3年以上のピアノ学習歴と1年間の学習歴の学生)とする。

プリントを使用して理論的な学習の後、実践をする。

4-2 授業の実施日と内容

6月10日(第1回目)

コードについての事前アンケートを取った後、コードの基礎的な知識の説明、コードの練習、伴奏付けを行う。

6月17日(第2回目)

コードの練習成果発表、楽譜へのコード記入、初見での演奏、事後アンケートを行う。

4-3 事前アンケート 結果と考察

6月10日に実施した結果が図1から図7である。図1の「コードネームについて知っていますか」という設問に対しては、知っているがよくわからないが6名(75%)、あまりわからないが2名(25%)であった。図2の英語の音名の理解は6名がわかると答えた。調について理解している学生は4名(50%)であった(図3)。和音の種類(メジャーコード、マイナーコード)などについては、わかると答えた学生は0名であった(図4)。楽譜に頼らず知っているメロディーに簡単に伴奏づけをすることができるか、との設問には1名だけ少しならできると答えた(図5)。ピアノで遊ぶ(宿題になったもの以外を弾いて楽しむ)ことはあるか、との設問に対しては、2名(25%)だけが無いと答えた(図6)。耳で覚えた曲を楽譜を見ずに弾くことがあるか、との設問には時々あるが3名、ないが5名であった(図7)。

ピアノ学習経験が比較的長い学生が多いため、ピアノに親しみ、若干の理論的知識もあるが、コードネームについての知識はほとんどないといえる。

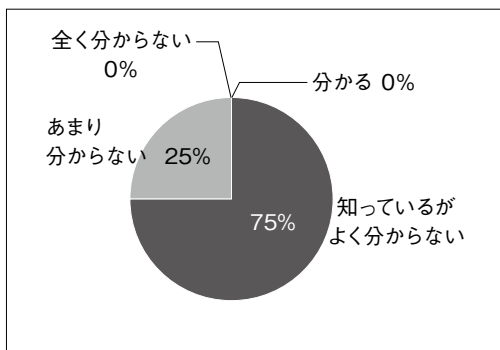


図1 コードネームへの理解

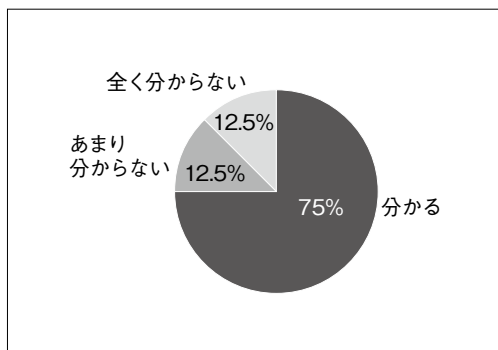


図2 英語の音名の理解

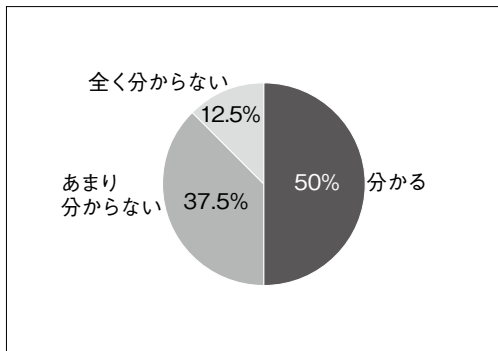


図3 調についての理解

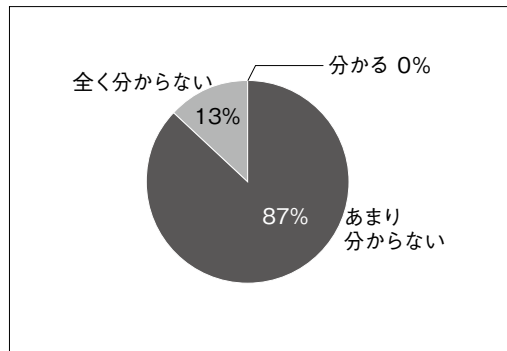


図4 和音の種類の理解

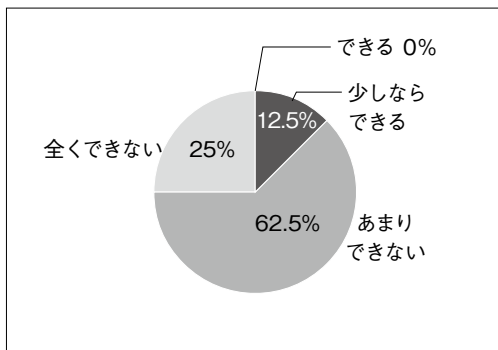


図5 簡単な伴奏付け

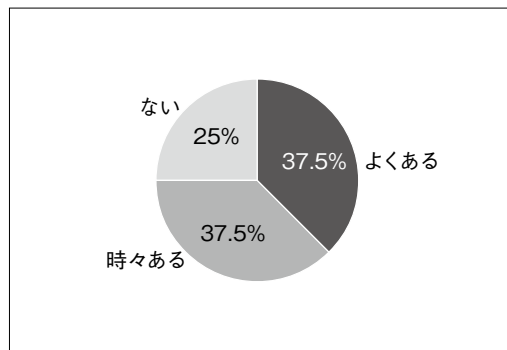


図6 ピアノで遊ぶことはあるか

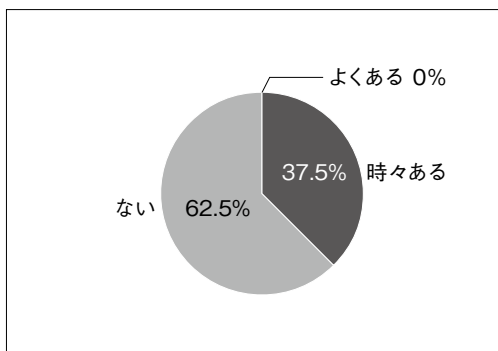


図7 耳で覚えた曲を楽譜を見ずに弾く

4-4 第1回目(6月10日)授業展開と考察

〔授業展開〕

- 1) コードの基礎的な知識の説明と基本的コード進行の練習
 - ・コードは英語での音名を使用する。
 - ・コードネームの表記の仕方。Cメジャーの音階上にできる和音について。

・主要三和音、属7 (V₇) の和音

・コードのつなぎ方 ① I-V₍₇₎-I ② I-IV-V₍₇₎-I ③ I-IV-I

・基本的コード進行を覚える。

① C→G→C (I-V-I)、② C→G₇→C (I-V₇-I)、③ C→F→C (I-IV-I)、

④ C→F→G₇→C (I-IV-V₇-I) (譜例1)¹⁴⁾

2) コードの実践練習

3) 次週に向けての課題説明

(譜例1) C→F→G₇→C (I-IV-V₇-I) (G₇は、第5音省略の音型を用いている)

(1) コードの基礎的な知識の説明と基本的コード進行の練習

コード進行においてはC、F、G、G₇の4種類のみを扱った。また、今回の授業はコードの入門という位置付けであり、まず、簡単に理解できることを目的として、コードも基本形的位置からのボイスイングの形を提示した。この4種類の基本的なコード進行のみ左右片手ずつと両手の練習を5分間行わせた。

(2) コードの実践練習

コードネームを声に出して言いながら3種類の伴奏パターン(譜例2)¹⁵⁾を練習した後、そのパターンを応用しながら「さよなら」「かっこう」「メリーさんのひつじ」「スワニー河」(譜例3)¹⁶⁾の4曲の練習を行った。1班は各自で15分間練習、2班はペアになって5分ずつメロディーパートと伴奏パートの役割を交替しながら片手練習を行った後、両手での練習を5分間行わせた。その後、一人ずつ演奏させて、確認を行った。

(譜例2) 3種類の伴奏パターン (何も記されていない小節は各自が補足して演奏する)

①

②

③

(譜例3) スワニー河 (冒頭部分)

スワニー河

S.C.Foster

(3) 次週に向けての課題説明

次週までの宿題として、「きらきらぼし」「かたつむり」「とんぼのめがね」「思い出のアルバム」の4曲に伴奏パターンを工夫しながら練習してくるよう課題を与えた。2班のみ、ペアでお互いにアイディアを出し合い、2人で片手ずつ役割交替をしながら合わせる練習もしてくるよう指示をした。

授業はプリントを用いて上記〔授業展開〕1)の流れで順に説明をした後、練習時間を交えながら行った。1班も2班も初めはやや苦手意識があるような様子であったが、実際にピアノで練習したところ、スムーズな理解を示し、次々と積極的に課題に取り組んでいた。ピアノ経験1年の学生は、和音をつかむことに慣れるまでやや時間がかかった。しかし、ペアになって連弾の形をとったことから、初めから両手で弾かなければという意識を持たずに、落ち着いて片手練習に取り組めたことが効果的だったようにうかがえた。また相手のパートを聴くことにより、自分がそのパートを弾くときに耳が慣れていて、初見でも比較的スムーズな演奏になっていた。

4-5 第2回目(6月17日)授業展開と考察

〔授業展開〕

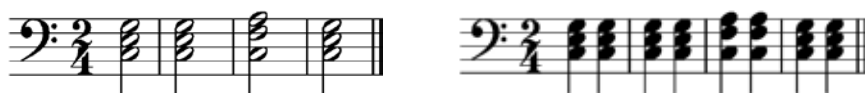
- 1) 課題確認
- 2) 4人でのアンサンブル(連弾):コードネームの記入と初見奏
- 3) コードネームの記入と初見奏(独奏)

(1) 課題の確認

「きらきらぼし」「かたつむり」「とんぼのめがね」「思い出のアルバム」の4曲に自由に伴奏パターンを付けてくる課題の練習成果発表を、1班は1人ずつ、2班は連弾で行った。

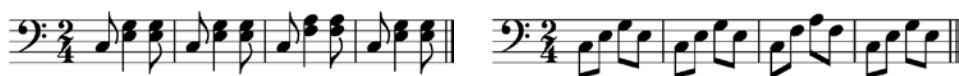
1人ずつ練習してきた1班では、譜例4のようなシンプルな伴奏パターンでの演奏が多く見られた。

(譜例4) きらきらぼし(冒頭部分)



2班はペアで練習を行ってきたことにより、譜例5のように伴奏形に工夫が見られ、楽しい演奏になっていた。

(譜例5) きらきらぼし(冒頭部分)



とんぼのめがね(冒頭部分)



思い出のアルバム(冒頭部分)



2班の学生たちは話し合って工夫した点として、「軽い感じにしたい」「やわらかな流れる雰囲気」などを挙げており、曲調に合わせた伴奏パターンを考えて付けている様子が見られた。アンサンブルにより、互いに意見を出し合い、お互いに気持ちを合わせながら伴奏を付けることで、より能動的な学びにつながったといえよう。

(2) 4人でのアンサンブル(連弾)：コードネームの記入と初見奏

テキストLesson4-10「ぶんぶんぶん」(譜例6)¹⁷⁾、Lesson4-12「新世界より」(譜例7)¹⁸⁾の和音にコードネームを記入させた後、班ごとに4人で1声部ずつ担当し、連弾で初見奏を行った。

(譜例6) ぶんぶんぶん



(譜例7) 新世界より



(3) コードネームの記入と初見奏(独奏)

テキストのLesson10-3「こもりうた」、Lesson10-5「オリンピア・マーチ」、Lesson11-1「小さなワルツ」、Lesson14-3「2列になって」にコードネームを記入させた後、そのコードネームを見ながら1人ずつ初見で演奏することを行った。

4人での演奏は、どちらの班もすぐに弾くことができた。ピアノを弾くことにもよく集中していた。他の人とテンポを合わせることは、正確に拍子を感じることであり、また、一定のスピードで楽譜を読んでいくことにより、読譜力の向上につながっていると考えられる。

学生たちは自身でテキストにコードネームを記入することで、どの曲も基本的に同じ和音でできている事や、ほぼC、F、G又はG₇の和音ばかりが使用されていることを認識することができた。また、同じ和音を探すという行為が、その和音の形を見分ける力の育成に繋がっていた。コードによる伴奏付けを1週間練習した成果もあり、新しい曲の1人での初見奏でも、記入したコードネームを読むことで左手が自然にその和音をつかみ、右手のメロディーパートを読むことに集中してスムーズな演奏ができていた。このことから、コードを理解し、その和音をつかむことによって、読譜力や初見力が向上することが明らかとなった。

さらに4人で1声部ずつ担当する連弾を取り入れたことで、楽譜をすぐ読むことができ、すぐ曲の形にできたことが、「初見でもすぐに弾けた」という喜びや満足感に繋がっていた。出だしでズレが生じた際、こちらで「もう1回やってみて」と声掛けをしたところ、互いに合図を出し呼吸を合わせることも自然に行えるようになった。連弾は協同作業であり、互いの呼吸を感じ一定のテンポで進んでいかなければならない状況が自然と生まれる。このような中から

連帯感も生まれ、その後の授業ではグループの雰囲気にとまどみが生まれ、授業をよりスムーズに行うことができるようになっている。

5 事後アンケート結果と考察

授業は理解しやすかったかの問いに対し、8名全員が理解しやすかったと回答した。また、C、F、G又はG₇のコードを使えるようになったかの問いでは、全員が「はい」と答え、コードに対する抵抗感もないと答えている。連弾を取り入れた2班では2人で合わせの練習を行った分、1週間の練習量は1日当たり、10分から15分程度の増加が見られた。

自由記述では次のような記述が見られた。

◎授業に対する感想

- ・コードは難しいイメージがあり、覚えたいけど手が出せないでいたが、基本から教えていただき、4つのコードがすらすら弾けるようになり、とても嬉しかった。
- ・最初は何が何だかわからない状態だったが、CやFなどのコードを知ることができて、理解できた。
- ・基本的な4つのコードがわかることで、譜読みを簡単にすることができた。4つの和音だけでこんなにも弾けることがわかった。
- ・先生の話やプリントの内容が詳しくあったので、覚えやすかった。

◎1人で弾くときと連弾で弾くときの違いを感じたか。

- ・1人の時よりも連弾の時の方が2人で案を出し合いながら練習することができた。
- ・同じリズムで合わせて弾くのが楽しかった。話し合いながらコードを考えることで、連弾している実感がわいた。

と肯定的な答えがあった反面、もうひとグループは

- ・1人だとすらすら弾けたが、2人だとペースなども変わるので合わせるのが少し難しかった。
- ・1人で弾くときは自分のペースでできたので安心してできた。

と答えている。このグループの1人はピアノ学習歴が短いため、2人の演奏レベルの差がこの結果をもたらしていると考えられる。

◎コードを記入してから改めて曲を演奏した時、変化はあったか。

- ・すらすら弾けるようになった。
- ・C、F、G、G₇以外にももっと覚えたいと思う。

- ・前よりも和音の動きがわかり、音を読まなくてもコードを見てスムーズに弾けるようになった。
- ・コードを覚えていたので、前よりすらすら弾けるようになった。
- ・授業でコードを教えてもらえてうれしかった。
- ・どんどんコードを覚えて早く譜読みができるようになりたいと思う。
- ・コードネームで楽譜が読めるようになるとは思わなかった。とても楽しかった。
- ・早くコードに慣れてできるようにになりたい。
- ・4つの基本的なコード以外にもたくさんのコードに興味を持つことができた・種類を知ること、おしゃれな和音になったりアレンジができてとてもいいと思った。

このようなアンケート結果から、学生たちが「学びたい、できるようになりたい」という気持ちを強く持っており、効果的な授業実践ができれば、「さらに深く学びたい」「もっとできるようにになりたい」に繋がることを改めて認識させられた。片手ずつ担当する4人でのアンサンブルを取り入れたことで、ピアノ弾くことにさほど難しさを感じずに演奏でき、友達と一緒にという安心感もあり、無意識のうちにピアノを弾くことへの抵抗感や恐怖感も和らげ、肯定的な言葉が多く出てきたと思われる。しかし、ペアでの連弾では2人に能力差がある場合、かなり配慮が必要である。

6 まとめ

本研究では、コードの学修を通して読譜力の向上、能動的な学修への効果について検証した。今回の研究対象学生はピアノ学習歴が比較的長く、ピアノを演奏することに対して余裕がある学生だったことも、理解力と実践力に結びついていると考えられる。しかし、『ピアノ・テキスト』の楽曲にコードを記入することを実践したところ、ピアノ学習歴の長短に関わらず、これまでただ読譜していたのとは違った楽譜の見方ができるようになったのは確かである。たった4種類の和音を繰り返し使用すること、楽譜からその和音を探すこと、C、F、Gなどの文字から音と形をイメージすることが、読譜力や初見力の向上に繋がった。この授業実践の後、通常のピアノレッスンの中で、学生が和音の音を間違えたり、和音の変化がスムーズにいかない時にコードを用いて説明すると、すぐに修正もできるようになった。Lesson 9以降基本のコードの動きが頻繁に使用されるようになるため、Lesson 9でコードの表示が出てくるときに関連付けてコードの指導をきっちり行うことは必要である。しかしLesson 9までもLesson3-11「メリーさんのひつじ」（アンサンブル）、Lesson4-5「大きな栗の木の下で」をはじめ、その後の曲にも今回扱ったコードが多く使用されている。ピアノ初心者がLesson 9ま

で到達するのは時間がかかるため、ピアノの授業に慣れてきた早い時期にコードの入門的学修を取り入れることは読譜力の向上や和音を意識させるうえでかなり有効であると考え。合わせてアンサンブルを取り入れることで、ピアノ初心者にとっても両手で弾く難しさから解放され、音楽を楽しむきっかけになる。また、通常の個人レッスンのルーティーン的な授業に変化が生まれ、学生同士のコミュニケーションが図られることによりクラスの雰囲気にも良い効果が現れ、互いに学び合う能動的な学修にもつながってくると考える。中央教育審議会答申で「教員と学生が意志疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」¹⁾としているが、今回の授業では、伴奏パターンなどもヒントを与えるとお互いに学生同士が工夫して演奏し、またそれに教員からアプローチをすることで、能動的な授業実践に結び付けることができた。また、学修意欲も高まったといえよう。

コードによる伴奏づけの知識や技能の習得は簡単ではないが、保育現場で求められる技能であり、1～2年間の学修期間の中で少しでも理解を深めさせ、「コードがわかる」「少しはできる」「使える」という学生を更に増やす努力が必要である。「保育表現技術 器楽Ⅰ」は複数の担当で授業を実施しており、また、学生の能力も様々で1年間に終わらせなければいけない課題をこなすのに手一杯の学生もいる。指導の在り方は学生一人一人の能力に合わせるべきであり、教員も様々なアプローチ方法を身に付けていなければならない。

平成24年8月の中央教育審議会答申では、「個々の授業科目が能力育成のどの部分を担うかの認識を担当教員間の議論を通じて共有し、他の授業科目と他教科との連携し関連し合いながら教育を展開すること」とある¹⁹⁾。「保育表現技術 器楽Ⅰ」の授業のみでコードの伴奏付けをできるようにすることは困難かつ不可能である。前述のとおり、「保育表現技術 音楽Ⅰ」「保育表現技術 音楽Ⅱ」「保育表現技術 器楽Ⅱ」でもコードの指導を行っている。これら4科目は、指導の段階を踏まえたシラバスになっているが、学生がこれらの授業を通して、卒業後の保育現場で「ピアノが弾ける」「コードによる伴奏付けができる」と自信を持つことができるよう、教科間での横断的かつ一貫した教育の実践が今後の課題といえよう。今回、コード進行の入門的指導において能動的学修を意識した授業実践の研究を行ったが、今後も学生が「～ができるようになった」と実感できるピアノ指導やその取り組み方法について、多角的に研究を深めていきたい。

引用文献

- 1) 中央教育審議会答申(平成24年)“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)”,文部科学省ホームページ 9頁.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (参照2019. 6.10)
- 2) 中央教育審議会答申(平成24年)“新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)用語集”,文部科学省ホームページ 37頁.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (参照2019. 6.10)
- 3) 溝上慎一：アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換, 7頁, 東信堂, 2014.
- 4) 溝上慎一：前掲書, 147-153頁
- 5) 中善則他 花園大学アクティブ・ラーニング研究会編：私が変われば世界が変わる・学生とともに創るアクティブ・ラーニング, 113頁, ナカニシヤ出版, 2015.
- 6) 幼稚園教育要領解説 平成30年3月：240頁, 文部科学省
- 7) 平石葉子：幼稚園、保育所から保育者養成校に求められている音楽教育, 奈良保育学院研究紀要第16号, 81-90頁, 2014.
- 8) 坂田直子、山根直人、伊藤誠：保育者養成における音楽的専門性の育成—幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問調査を手がかりに一, 埼玉大学紀要 教育学部, 58(1), 15-30頁, 2009.
- 9) 奥田昌代：保育者養成における、ピアノ伴奏技能向上の試みⅡ—指導法変更に伴う効果についての量的分析一, 大阪親愛女学院短期大学紀要 第43集, 29-36頁, 2009.
- 10) 浅見愛：保育者養成におけるコード伴奏を内容とするピアノ実技の授業構成—指導内容の四側面を関連づける立場より一, 学校音楽教育実践論集, 3巻, 128-129頁, 2019.
- 11) ピアノ・テキスト編集委員会：幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト改訂版—レッスン24とその応用一, ドレミ楽譜出版社, 2014.
- 12) 横溝聡子：保育者養成校におけるピアノ指導法—アンサンブル曲に着目して一, 郡山女子大学紀要, 第55集, 239-251頁, 2019.
- 13) 梁島明子・山崎和子・坂井康子・松井明恵：初等教員養成のピアノ指導についての研究(2)—基礎と応用一：京都教育大学紀要, Ser. A. No. 83, 49頁, 1993.
- 14) 森本琢朗・内藤雅子：コードを覚えてピアノを弾こう(1), ドレミ楽譜出版社, 23頁, 2009.
- 15) 砂土原知子：コードがわかる! すぐ弾ける! 新・やさしいピアノ伴奏法(1)〈入門編〉, ドレミ楽譜出版社, 27頁, 2001.
- 16) 森本琢朗・内藤雅子：コードを覚えてピアノを弾こう(1), ドレミ楽譜出版社, 22頁, 2009.
- 17) 前掲10), 38頁.
- 18) 前掲10), 40頁.
- 19) 前掲1), 20頁.

